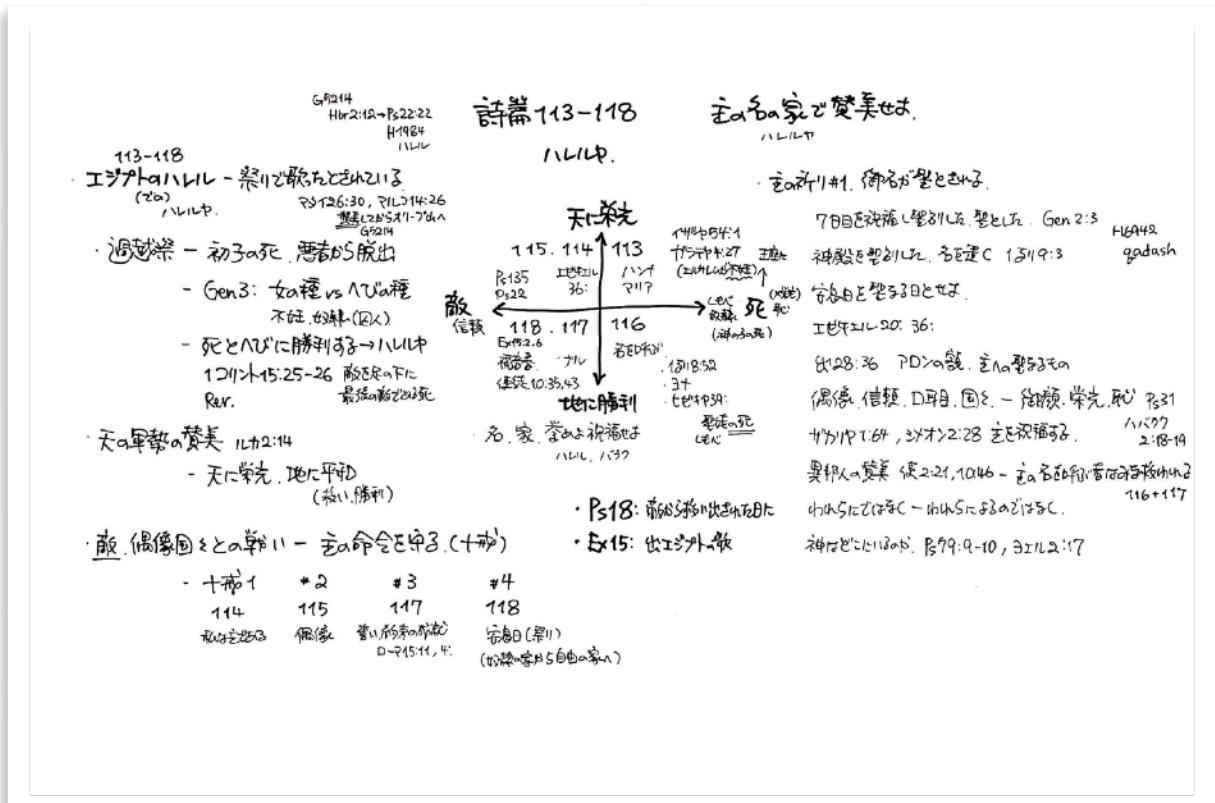




詩篇107-109篇の編集構造



詩篇113篇から118篇までの構造の分析です。第5巻の第1集です。

主に感謝せよの段落です。107から118まで。107から112まで見ていった時に、これらは主の祈りの課題をそれぞれ歌っていると思われます。107、108と順番に上がっていくのですが、「主の御名をあがめさせたまえ」というのが、107から112までの中になかったのです。主の御名を聖とする。それはどこに行ってしまったのかというと、113から118の中で一番長く歌っています。ハレルヤというのは、主の名をほめたたえるという意味ですね。このハレルヤが111、112の最初にもついているのですが、113からのところの出だしについています。ヘブライ語のものと70人訳のものと構成が違っていたりするのですが、編集した人は、おそらくそれぞれの初めに付けたかったのだと思います。このそれぞれの詩篇の終わりについてしまっていますけれども、次の詩篇の初めに付けるものかなと思います。114と115は、ひとつに編集されているものです。それで116を2つに分けて、数え方が違うものがありますけれど、その面からもこの114と115の間にはハレルヤがないので、この2つはセットで考えなければいけないということが、そういう事からも分かるものだと思います。

113から118は、伝統的にエジプトのハレルという言い方で呼ばれているようです。過ぎ越しの祭りの時に(過ぎ越しの祭りだけではないようですが)、この時にこれを歌う、この時にこれを歌う、みたいに決まっていたようです。マタイ福音書の過ぎ越しの祭りの時(26:30)、過ぎ越しの食事の後に、賛美の歌を歌ってからみんなでオリーブ山へ出かけて行った。主イエスと弟子たちが「賛美の歌を歌って」と書いてあります。賛美

の歌の「賛美」は、ギリシャ語で言うと4回しかなくて、マルコ福音書は同じオリーブ山に行くところ。それとパウロとシラスが牢屋の中で歌って賛美していること、それとヘブル人への手紙の2章で、詩篇22篇を引用して兄弟たちの中で賛美しますという「賛美」です。詩篇の22篇を見ると、その言葉はハレル、いわゆるハレルヤのハレルということですので、イエス様と弟子たちもこの伝統に従って過ぎ越しの祭りの時に、このハレル113から118の中の歌を歌っていたのじゃないかと言われるのは、こういうところから来ています。

過ぎ越しの祭り自体はどういう祭りだったかと言うと、初子が殺される。その殺される、死から過ぎ越されて、悪者の支配から脱出するというのが過ぎ越しでした。過ぎ越しの問題は元々どこから来るかと言うと、創世記の3章の蛇との戦い。女の種と蛇の種の戦い。子孫の戦いなのですね。女の子孫と蛇の子孫というのは、王様の子供です。神様の子供、相続人。初子というのも相続人です。相続人がいないというのが不妊なのです。奴隷も自由じゃないので相続がないのです。継続できないということですね。

113篇は子を産まない女たちが喜びますという箇所、ハンナの歌の引用です。それとマリアの歌も同じような事を歌いますよね。それは貧しい者を高く上げる、王座につかせるということですが、この113篇を見ると、この女の子孫との戦い、女の子孫と蛇の子孫の戦いということがあって、このような不妊の女の話があるのだと思います。ガラテヤ人への手紙の4章でイザヤ書54章の箇所を引用して、不妊の女が喜ぶようになるという時には、女性の個人の話をしているのではなくて、「エルサレムが」という話なのですね。エルサレムが子を産むようになる。エルサレムが不妊だった。シオンが神の子を産めないようにされていた。その問題が解決されるということですので、どちらかという国としての救いの方を連想するように113篇が書かれています。それで死と蛇に対する勝利、敵ですね。第1コリント15章25節にあるように、主イエスが来て、敵を足の下に従わせる。そして最後の敵である死も滅ぼす。最後の敵である死も滅ぼすということが、この不妊の問題を解決する。そして虐げていた者たち、足の下に従わしていますから、虐げていた者たちを救い出すということが、死と蛇に対する勝利です。

116篇の方は、不妊ではなくて聖徒の死なのですね。神様のしもべが虐げられて死ぬ。しかし聖徒の死は、主の名を呼ぶ者なので救われるということがこの116篇のほうです。死、しもべ、しもべと書いてありますけれど、「あなたのしもべはしための子」と116篇でも113篇でも言いますが、このしもべ、奴隷の家から連れ出される。死から救われるということがテーマなのですが、今度この敵が裁かれるというのが、114、115、117、118の方だろうと思います。福音書のところで主イエスが来られた時に、天の軍勢が賛美しました。その賛美の言葉は、いと高きところ天に栄光、そして地に平和ということでした。

天に栄光という方が113から115で、地に平和という方が116、117、118。平和というのは、救いとか勝利を与える。救いという言葉が116からのところにたくさん出てきますけれども、救い主ですね。116、117、118は、地で救いを、勝利を与えてくれるということで、この並行があると思われます。この敵の国々に勝つ。蛇の子孫に勝ちますというところは、敵、偶像の国々との戦いということですね。これは全世界、神様が造られたものが賛美する。海、山、川も、国々も。

115篇の方は、具体的な敵が滅ぼされるということ。天地を造られた主、それと奴隷の家から連れ出してくださった主と、その2つ。十戒の出エジプト記のものと、申命記の安息日のところの理由ですね。その理由の創造の方が114、117。奴隷の家から連れ出す方が115と118かなと思います。この4つの詩編(114、115、117、118)を、

敵と戦う、主に信頼して偶像により頼まないという信仰の戦いをする時に、主の命令を守るということがその戦い方なのですね。主の命令を守ると言った時にも、十戒を要約されているから思い出すわけです。特に、神様との関係で考えると、1番目から4番目。この1番目から4番目それぞれが、114、115に並行してるのじゃないかと思いました。

114篇は、私は主である、他に神はいないということですね。115篇は偶像の話をしていましたから、偶像礼拝するなというのが、2番目。1つ飛ばして4番目の118篇は、主が家に入ってきて祭りの日、そして喜びの日に賛美する、感謝するということですので、その勝利の日、安息日を思い出す。奴隷の家から自由の家に導かれた安息日の歌として118篇を見ることが出来ると思いますので、これが4番目

。117篇が3番目だったら都合がいいのですが、117篇はローマ人への手紙15章で引用されます。ローマ人への手紙の15章11節で引用される「すべての異邦人よ主をほめたたえよ」という箇所は、異邦人が救われるという話なのですが、異邦人もハレルヤと言うようになるのは、アブラハムに与えられた約束の保証、アブラハムの約束が成就するというのを預言しているようなものということだと思います。ローマ人への手紙の4章にアブラハムの子孫の話がありますけれど、アブラハムは世界の相続人になったのですね。その相続人になるという約束は決して破られることはない。その誓いが果たされる。誓いが果たされるというのは、神様の名が聖である。聖い神様、絶対にその誓いを破らない神様だということによって、神様の名前が聖であることがあらわされる。その誓い、アブラハムの約束が成就するというのが117篇ということで、この3番目の命令を守る。117篇の言い方と108篇の中にある1節が似ていて、それは、「もろもろの国の中で民よ主をほめたたえよ」というものでした。117篇は「もろもろの民が主をほめたたえる」にもっと発展して変わっています。そういう意味で約束が成就していると。全世界の救い、全世界で主の名がほめたたえられることを求めるというのがこの祭司の民の役割です。ハレルヤと歌って勝利を歌ってる時に、全世界が主をほめたたえるようになることを求めている。自分たちが勝ったと喜んでいうわけではない。全世界の救いのためのということでしょうね。それがこの113から118です。

詩篇18篇からの引用があります。死の綱が私を取り巻きというところとか。ハンナの歌自体を引用しているのも18篇を思い出すものになりますね。18篇はハンナの歌を思い出して歌っているものだから。他にも我らの盾というようなことがあったりしますので、18篇を思い出します。18篇はダビデが敵から救い出された日に、というように記録されていますので、まさにこの敵から救い出された日。18篇を読むとエジプトから連れ出されたかのような、雷が鳴ったり、雲が降りてきたりみたいなことが書いてあったりしますので、エジプトから連れ出されたことと、敵から救い出されること。これが、自分の人生とエジプトから連れ出されていることを同じような事として見ているということがわかりますよね。出エジプト記の15章からの引用とかを思い出す箇所もありますので、この113篇から118篇は、約束されていた死からの勝利、敵に対しての勝利、それが与えられたので、「天で栄光あれ、地にその勝利がもたらされるように、ハレルヤ」という歌の、主の祈りでいうところの1番目の祝福が、この113篇から118篇で歌われているというものだと思います。